

マタイ福音書講話（4）

マタイ 2 章 13～15 節【エジプトに避難する】

13 節「占星術の学者たちが帰って行くと、主の天使が夢でヨセフに現れて言った。『起きて、子供とその母親を連れて、エジプトに逃げ、わたしが告げるまで、そこにとどまっていなさい。ヘロデが、この子を探し出して殺そうとしている。』」

イエス様がこの世に生まれると、さっそくヘロデによる迫害が始まりました。この出来事は皆さんの上にも同じように起っているのです。皆さんの信仰を無くそうと悪魔はいつも働き、全力で襲いかかってきます。悪魔はのん気ではありません。「あなたがたの敵である悪魔が、吠えたける獅子のように、誰かを食いつくそうと探し回っています。信仰にしっかり踏みとどまって、悪魔に抵抗しなさい。」（1ペトロ 5：8～9）とペトロもいっています。せっかくクリスマスに信仰が芽生えても、それを放っておくならば悪魔に食いつくされてしまうでしょう。ヘロデは皆さんの中に住んでいます。教会に行くのを止めようとさせ、聖書を読むことも祈ることも止めさせようとします。そのままなら皆さんの信仰は死んでしまいます。しかし私たちが聖書を読み、礼拝をすると、信仰（イエス様）が再び私たちの中に生まれ、イエス様は育つのです。信仰は赤ちゃんのように小さく弱いのです。信仰を消そうとする世の力は強く、大きいのです。また誘惑も大きいのです。すぐに人は信じられなくなります。しかしその小さな命を守ってくれたのがマリアとヨセフです。彼らは教会の雛形です。自分の信仰を生かすためにも教会から去っては行けません。

14 節「ヨセフは起きて、夜のうちに幼子とその母親を連れてエジプトに去り、」
15 節「ヘロデが死ぬまでそこにいた。それは『わたしは、エジプトからわたしの子を呼び出した』と、主が預言者を通して言われていたことが実現するためであった。」

このエジプトへの逃避行は、預言の成就であるとマタイは言っています。旧約聖書ホセア書 11：1 にこう書かれています。「まだ幼かったイスラエルをわたしは愛した。エジプトから彼を呼び出し、わが子とした」。ホセア書ではイスラエルの民のことが預言されているのですが、マタイはイエス様がエジプトに下り、そこから再び神様によって呼び出されたのだと解釈したのです。昔モーセがファラオの迫害から逃れて生き残ったように、イエス様もヘロデの迫害から逃れ、新しいモーセとなってイスラエルの民を罪と死から解放するのです。この物語はイエス様の「新しい出エジプト」を意味しているのです。イエス様と共に旅をするヨセフとマリアは新しい信仰の民として描かれています。こうしてマタ

イは旧約の預言を引きながら、イエス様こそ新しいイスラエルの民であることを証明しようとしています。このようにしてイスラエルの歴史を繰り返すことによって、古いイスラエルの不従順を、新しいイスラエルの民の代表としてイエス様が回復（再統合）しているのです。

マタイ 2章 16～18 節【ヘロデ、子供を皆殺しにする】

16 節「さて、ヘロデは占星術の学者たちにだまされたと知って、おおいに怒った。そして、人を送り、学者たちに確かめておいた時期に基づいて、ベツレヘムとその周辺一帯にいた二歳以下の男の子を、一人残らず殺させた。」

占星術の学者たちはヘロデの命令を無視して、自分の国に帰ってしまいました。そこでヘロデは怒り、ベツレヘム周辺にいた二歳以下の男の子たちを残らず殺しました。なぜ二歳以下の男の子かと言うと、「学者たちに確かめておいた時期に基づいて」とあるように、星が現れたのが二年前だったからです。このように、イエス様の身代わりとなって多くの幼い子どもたちの命が失われました。教会はこの子供たちを殉教者として記憶しました。

17 節「こうして、預言者エレミヤを通して言われていたことが実現した。」

18 節「ラマで声が聞こえた。激しく嘆き悲しむ声だ。ラケルは子供たちのことで泣き、慰めてもらおうとしない、子供たちがもういないから。」

エレミヤの預言とは何でしょう。「主はこう言われる。ラマで声が聞こえる。苦悩に満ちて嘆き、泣く声が。ラケルが息子たちのゆえに泣いている。彼女は慰めを拒む。息子たちはもういないのだから。」（エレミヤ 31 : 15）昔、イスラエルの国はバビロンに滅ぼされ、人々はバビロンに奴隷となって連れて行かれました。ラマはベツレヘムに近い町の名で、エルサレムが陥落したさい、捕囚の民はここに集められてシリアに向けて出発しました。このラマには、イスラエルの十二部族の祖であるヤコブの最愛の妻ラケルの墓があります。ラケルはヤコブの末子ベンヤミンの産後の肥立ちがわるくラマで死に、ベツレヘムの近くに葬られました。そのラケルの墓の側をイスラエルの末裔たちが奴隷として通って行く時、ラケルは墓の中でどんなに嘆き悲しんだことだろうというのです。ここでも子どもたちの為にラケルが泣いているというのです。

クリスマスのお話が私たちにはっきりと告げているのは、イエス様の誕生は天の王様の誕生であり、天の王国の誕生だということです。イエス様が生まれた時、地上の王アウグストゥスは自分の帝国内の民を登録しましたが、イエス様もご自分の民を天に登録しました。イエス様がこの世に来られてから、この世と神の国の両方が共存しているのです。

●アウグスティヌスはこんなことを書いています。「今日、この世に地上の国があり、また、そこには天上の国もある。これら二つの国、地上の国と天上の国、根こそぎ引き抜かれるべき国と永遠に植えられる国はそれぞれ旅人である市民を持っている。この世に於いてただ、二つの国の市民は混じり合っている。」

光の登場によって闇はいつそうはつきりします。本物が現れたときには、偽物ははつきりしてしまいます。キリストの誕生によって人々は、二つに分かれました。キリストに従う者と、別の者に従う者。キリストを王とする者と、別の者を王とする者。キリストの国に属する者と、地上の国に属する者。あなたはどちらかを選ばなければなりません。

マタイ 2 章 19～23 節【エジプトから帰国する】

19 節「ヘロデが死ぬと、主の天使がエジプトにいるヨセフに夢で現れて、言った。」

20 節「起きて、子供とその母親を連れ、イスラエルの地に行きなさい。この子の命をねらっていた者どもは、死んでしまった。」

21 節「そこで、ヨセフは起きて、幼子とその母を連れて、イスラエルの地へ帰って来た。」

それにしても神様は人間の手に小さなイエス様を任せて不安ではなかったのでしょうか。父なる神様は、ご自分の独り子であるイエス様が迫害されても、すぐに手を下してヘロデを滅ぼすことはしませんでした。イエス様は殺されそうになって逃げ回っています。何でイエス様はこんなに弱いのだろうと思います。それは今の時代も同じです。神はこの世界に本当におられるのだろうか、なぜ悪を速やかに滅ぼしてくれないのか、神に期待してもいいのだろうか私たちは思ってしまう。でも神様はこれらの物語を通して、悪は自滅するから放っておきなさい。どんなに悪の力が強く見えても怖れることはないということを教えているのです。イエス様は、十字架におかかりになる時も同じことを言われました。「もはや、あなたがたと多くを語るまい。世の支配者が来るからである。だが、彼は私をどうすることもできない。」(ヨハネ 14:30) その通り、イエス様は殺され墓の中に閉じ込められましたが、そこから輝いて出てきてしまいました。悪魔も死も墓も封印も兵士もイエス様をどうすることもできませんでした。誰も勝てなかったのです。どんなにこの世に悪が満ちても、善を滅ぼすことが出来ません。どんなにこの世の死の力が強く見えても、神の命を殺すことは出来ないので。聖書をよく見て下さい。「ヘロデが死ぬまでそこにいた。」(15)、「ヘロデが死ぬと」(19)、「この子の命をねらっていた者どもは、死んでしまった」(20)、と繰り返し「死んだ、死んだ、死んだ」と言われています。ヘロデは必ず死にます。悪も死も必ず死にます。そして最後には信仰と善

と命が残るのです。これが世界はどこに向かっているかの答えです。どんなに悪の力が大きいように見えても希望を持ちましょう。ただあなたの中に宿ったイエス様の命を大切に守りましょう。これがあなたを生かしてくれます。

さらにここには4回も「起きる」という言葉が出てきます。「起きて、子供とその母親を連れて、エジプトに逃げなさい」(13節)、「ヨセフは起きて、夜のうちに幼子とその母を連れてエジプトへ去り」(14節)、「起きて、子供とその母親を連れ、イスラエルの地に行きなさい」(20節)、「そこでヨセフは起きて」(21節)。夢から覚めれば起きるのが当たり前です。わざわざ「起きて」という言葉を書かなくてもいいのに、まるで強調しているかのように書かれています。それは起きるという言葉に意味を持たせているからです。今日の聖書の箇所の中には「夢」という言葉が何度も出て来ます。「主の天使が夢でヨセフに現れて言った。」(1:13)、「主の天使がエジプトにいるヨセフに夢で現れて言った。」(1:19)、「夢でお告げがあったので」(1:22) 夢とは何でしょう。聖書では、夢は旧約の時代以来、神様がみ心を示される一つの方法としてよく出て来ます。夢に導かれるというのは、言い換えれば神の言葉に導かれるということです。信仰者とは夢を見、夢に生きる人たちであるということができるといえるでしょう。預言者ヨエルの言葉に「わたしはすべての人にわが霊を注ぐ。…老人は夢を見、若者は幻を見る。」(ヨエル3:1) というのがありますが、聖霊を受けた人は神の夢を見る人になるのです。ヨセフはこの後、イエス様が12歳の時の宮もうでに登場しただけで、聖書の中から消えてしまいます。この平凡なヨセフという人の特徴は何でしょうか。それは「夢に導かれて生きる人」であったということでしょう。ヨセフは夢のお告げを、単なる「良いことば」として終わらせなかったということなのです。その夢に全力を注ぎ、自分の人生をかけ、自分の命をかけていったということなのです。それが「起きる」ということであり、彼の信仰的な決断と行動を表しています。つまり彼は信仰に起きていた人だったということなのです。

22節「しかし、アルケラオが父ヘロデの跡を継いでユダヤを支配していると聞き、そこに行くことを恐れた。ところが、夢でお告げがあったので、ガリラヤ地方に引きこもり」 幼児殺戮後、ヘロデは死に、彼の王国は遺言によって三人の息子に分けられました。ユダヤはアルケラオに、ガリラヤはヘロデ・アンティパス（ヘロデ大王とは別人）に、北東地方とヨルダン川東側はフィリポに与えられました。アルケラオは父ヘロデ大王にまさる残忍な王であったようで、ユダヤに住むことをやめ、イエス様の家族はガリラヤへ引きこもることにしました。このガリラヤ地方は外国人との関係が強い地方で、やがて救い主が世界の民の救い主となる前触れだと見る事ができるでしょう。

23 節「ナザレという町に行って住んだ。『彼はナザレの人と呼ばれる』と、預言者たちを通して言われていたことが実現するためであった。」

「彼はナザレの人と呼ばれる」との文字どおりのテキストは聖書には見つかっていません。ここにはたぶん言葉の遊びがあります。「ナザレの人」と訳されている単語はナジル人(nazir)と呼ばれる、神に特別の願をかけて神のために取り分けられた(聖別された)人と、若枝(netzer)の語呂合わせではないかと主張する学者がいますが、はっきりしたことはわかりません。

・「その子は胎内にいるときから、ナジル人として神にささげられているので、その子の頭にかみそりを当ててはならない。」(士師記 13 : 5)